２０２３年９月２４日説教　聖霊降臨後第１７主日（特定２０）

ヨナ書 3 章 10~4 章 11 節
フィリピの信徒への手紙一１章 21~28 節
マタイによる福音書 20 章 1~16 節

先週は、谷中墓地委員会という会合に初めて参加いたしました。また昨日は午後に逝去者記念聖餐式があり、公祷の礼拝として初めてでした。３０人近い方々がご出席下さり、礼拝後は１階ホールで、お茶とお菓子で交わりのひと時を持ちました。赴任して３年目ですが、教会はいつも新しい学びと発見がある場所です。

さて、本日の旧約は、ヨナ書、その結末の部分が選ばれています。ヨナ書が日課となるのは今年初めてではなく、８月１２日の聖書日課にもありましたので、本日は福音書を中心に学びたいと思います。

本日の福音書は、天国の譬えの一つ、ぶどう園で働く労働者の譬えです。イエス様のたとえの中でも有名なもののひとつです。たとえの背景にあるのは、イエス様の時代の農業事情、ことに大規模な農園における労働事情です。農業に関する道具が機械化された現在でも、収穫には人手がいります。イエス様の時代も同じであり、ことにぶどうの収穫は人手がいります。それゆえ、収穫の時にだけ人を雇うということがあったのです。ただし、その雇い方が特別でした。

たとえ自体は、「**天の国は、ある家の主人に似ている。**」（マタイ 20：1）で始まります。「天の国は～に似ている」という表現は、マタイ福音書でよく用いられる表現です（13：31、13：33、13：44 など）。たとえの物語自体は、「**主人は、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けとともに出かけて行った。彼は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った**」（マタイ 20：2）と始まるのですが、そのあと展開が、たとえを聞く人に大きな問いかけを投げかけます。９時、１２時、３時、５時と雇い続け、最終的に雇われた時間（労働開始時間）と、働いた時間の長さが異なるにもかかわらず、労働者に与えられた報酬は、約束された１デナリオンであったからです。一番長く働いた人も、一番短く働いた人が１デナリオンでした。

この物語には、何の不正も約束違反もサービス残業もないのですが、たとえを聞いた人は、すこし疑問に思ってしまうお話の結末です。一番長く働いた人からは、当然不満が出ます。「**最後に来たこの連中は、一時間しか働かなかったのに、丸一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと同じ扱いをなさるとは**」（マタイ 20：12）。「暑い中を辛抱して」、この言葉には、イスラエルの農業事情も関係しています。イスラエルは、秋に種をまき、春に収穫するからです。これから暑くなる時に収穫をするので、真夏ではないとしても日中の収穫は大変です。

その不満に対して、主人は、一人ひとりとの約束を、何も破っていないことを確認して（マタイ 20：13-14）、「**自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか。**』」（マタイ 20：15）と語ります。そして、最後に、「**このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。**」（マタイ 20：16）とたとえ結ばれます。この最後の部分は、たとえの物語の中の主人というよりも、このたとえを語っているイエス様の言葉ともいえるでしょう。

みんな一律一デナリオン。良く言われます通りに、現実的にはこのような事例

が起こることはまずないでしょうし、もし一度でもこのような事例があれば、次の日には、９時に並ぶ人はいなくなり、誰もがみんな、５時に待つようになる、そのように言われます。しかし、現実の労働事情と照らし合わせて考えることは、この譬を話したイエス様の意図に反しています。ただし、そんな気前の良い主人などいるわけがないだろうと思ったのであれば、それは、イエス様がこのたとえを語ろうとした意図に近づきます。なぜならば、イエス様は、働くこととは何かというような意味でこのたとえを語ったのではなく、天の国の譬えだからです。そして、主人は、主なる神様の存在を暗示しているからです。

現実の世界では、長く働いた人が多く報酬をもらい、短い人は少ないかも入れません。あるいは、能力や資格、結果によってよって差が出るでしょう。また、時間や結果に関係なく報酬が同じだったら、誰もまじめに働かないかもしれません。しかし、天の国は、そのようなこの世の延長線上にあるのではない。イエス様はそう語っているのです。天の国、それは、主なる神様が支配し、その意思が現れる世界であり、一杯働いたから多く、長いから多く報われる、逆に働けなかったら、少なく、駄目だったら少なくしか報われない、そのような人間の観点や尺度を超えている世界である、イエス様はそう語っているのです。だからこそ、それは神様が本当によしとした世界であり、そこに本当の命があると語っているのです。もちろん、そのような世界が、この地上にももたらされることが望ましいのかもしれませんが、この譬は、その具体化、現実化の困難さも同時に語っているのかもしれません。だからこそ、このイエス様の譬えに示されているのは、ヨナ書と同じ、主なる神様が「**恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であること**」（ヨナ　4：2）です。その方が支配される素晴らしい世界のあり方が浮かび上がるのです。

今週から使徒書がフィリピの信徒への手紙になりましたが、本日の使徒書の箇所も、ヨナ書で表現されている主なる神様という点で結びついています。パウロは、イエス・キリストを通してその主なる神様を改めて信じるに至ったからこそ、パウロは、「**私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益なのです**」（フィリピ１：21）と語るからです。すなわち生きて宣教活動を通してキリストを示しても、獄中で死を迎えても、慈悲深く恵みに富んだ主なる神様の姿を示すことになると語るのです。パウロのそのような確信は、信仰者とは、肉体が離れても霊的には時空を超えて結びついていること、この世界と死後の世界とに分かれたとしても結びついていることを示しています。

いま私たちが生きている世界では、不満を言う預言者ヨナよりも、一番長く働いたぶどう園の労働者よりも、獄中のパウロよりも、戦いや混乱や自然災害の中で、もっと悲惨でつらい時を過ごしている人も多くいると思います。冒頭で、先日逝去者記念礼拝をいたしましたとお話しました。その礼拝は、わたしたちが教会に集められることを通して、すでに天にいる方々と、時空を超えて結び付いていることの証です。だからこそ、私たちは、この世界にどんなに悲しいニュースがあったとしても、希望を失わないのです。ヨナ書やイエス様のたとえに描かれているような喜びに満ちた結末は、すぐにこの世界にも訪れることはないかもしれませんが、そのような結末が来ることを願ってこれからも一緒に歩み続けていきたいと思います。